

# 成人看護学慢性期実習における学生の学び

## College Student's learning in Clinical Nursing practice —Analysis of reports after adult chronic nursing practice—

寺田 智美 棚橋 泰之

Tomomi TERADA, Yasuyuki TANAHASHI

(神奈川県立短期大学部 看護学科)

キーワード：学生の学び 成人看護学慢性期実習 患者現象 機能的健康パターン 質的記述的研究

### 要旨

本研究の目的は、成人看護学慢性期実習で学生が注目した患者現象の傾向と臨地実習の看護実践から学生が如何なる学びを得ているのかを明らかにすることである。成人看護学慢性期実習を終了した学生92名を研究参加者とし、学生が記述した課題レポートを研究資料として質的記述的研究手法を用いて分析した。分析の結果、学生が注目した患者現象は対象の健康管理に関する内容と対象の日常生活活動と活動を支える機能面が大半をしめ心理社会的側面の患者現象への注目は1割ほどであった。

学生の学びの分析は、《慢性疾患の対象の理解》、《慢性疾患に特徴的なケア》、《対象との紡ぎ合いの中での学び》、《自己の看護観の明確化》の4つのカテゴリーが抽出された。学生の学びを促進するためには、教員が慢性期疾患を抱える対象理解や患者現象の解釈を促す中範囲理論の提示やカンファレンスの運営が効果的な教育方略であることが見出された。一方で、チーム医療が展開されるなかで〔他職種との連携〕に関する学びの機会が少ないことが明らかとなり、他職種と連携する場面や他職種のチームカンファレンス等に学生を参加させ上記視点を育成する必要があることが示唆された。

### I. はじめに

臨地実習は、授業で学習した知識を実践に結び付けることや、実際の対象へ看護を提供する中で看護技術の習得や看護師としての思考や態度を学習する看護基礎教育において重要な教育内容である。本学看護学科では3年次に2週間の成人看護学慢性期実習を行っている。この実習は、学生一人につき1名の慢性疾患を持つ対象を受け持ち、発達段階、健康障害、診断治療に応じた看護過程を展開する。そこでは、対象に対する適切な援助方法、対象のセルフケアや生活を尊重した支援を理解することを目的としている。しかし、これまでの実習指導の中で、学生は身体障害により不足しているセルフケア行動に目を向けることはできるが、慢性疾患を抱えながら健康増進・健康回復・疾病予防という広い視野からセルフケアを捉えるまでに至っていないということが課題であった。このことが影響し実際の支援内容も現時点で抱

える問題に限局する傾向にあった。

そこで、慢性疾患患者の特徴や看護について受け持ち患者を通して自己の看護を振り返り、自己の看護の意味づけや学びの明確化を目的として、成人看護学病棟実習の最終日に課題レポートを課した。課題レポートは、看護過程にそった看護実践から学生自身が最も力を注いだテーマを設定し記述することとしている。したがって学生が実習中に熟考し、悩みや困難、看護するものとしての発見など多くの学びが反映されたものと考えられる。

成人看護学慢性期実習における学生の学びについて幾つかの先行研究は散見されるが、いずれも学生が記述したレポートを質的な分析手法を用いて学生の内面化のプロセス<sup>1)</sup>や特定された看護問題の傾向<sup>2)</sup>、実習目標との整合性<sup>3)</sup>についての報告である。それらの報告の前提となる受け持ち患者の男女比、年齢、疾病構成は大きな相違があり、また実習目標や実習期間にも相違を認めた。以上より実習終了後の課題レポートを分析することにより学生の学びを明確にすることは可能であることがわか

受付日 2014年2月2日

受理 2014年3月3日

る。また、学びの前提となる教授内容や受け持ち患者の対象特性の影響があることは否めず、本学独自に学びを確認する必要があることが示唆された。

そこで本研究では課題レポートを題材に本学の学生がどのような患者現象に着目し、そのような学びを得ているのかを把握することで、今後の臨地実習指導や授業を構築するための資料とすることを目指した。教員が学生の関心に注目し、そのことを踏まえた臨地実習指導や講義における教授方略を検討することは成人教育学の観点からも、学生の学習意欲の向上や自己学習を推進させることにつながっていくものと考えられる。

## II. 研究目的

成人看護学慢性期実習後に学生が記述した課題レポートから、学生が注目した患者現象並びに臨地実習の中でどのような学びを得ているのかを明らかにする。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン

研究デザインは学生が捉えた学びの内容を、記述された課題レポートから抽出できる質的記述的研究方法を用いた。

### 2. データ収集方法

本研究の研究対象は、平成25年度に成人看護学慢性期実習を履修した本学看護学科3年生93名が実習終了後に記述した課題レポートであり、本研究の同意が得られた学生の課題レポートを分析対象とした。データ収集期間は、平成25年12月—平成26年1月とした。

### 3. データ分析方法

データ分析は以下の手順で行った。

- ①課題レポートから学生の学びに影響する対象の背景を把握するために、患者の年齢及び疾患を抽出する。
- ②学生が着目した患者現象を把握するために、学生が特定した看護問題と、看護問題特定に用いられた概念を抽出する。
- ③学生の学びの要素を抽出するために、課題レポートを研究者2名が繰り返し読み、両者が学びの記述と判断した部分を抽出しデータ化する。次にデータを熟読し学びの要素を内容の類似性でカテゴリー化する。上記の分析過程は研究者2名で同一の作業を行いその後検討することで妥当性の確保に努めた。

### 4. 倫理的配慮

本研究は、2013年10月に神奈川歯科大学研究倫理審査委員会の承認を受けた。研究参加予定者に対しては、全実習が終了後に研究の目的や内容を説明する許可を得

た。了解が得られた参加予定者に「研究説明書」を用いて、研究の目的、内容、対象の権利保障について説明し、研究協力の承諾を得た。同時に「同意撤回書」も渡し、研究協力は対象者の自由意思であり、研究協力の同意をしてもいつでも研究途中で辞退することができること、途中辞退をしても、対象者の成績に一切の影響がないことを文書と口頭で説明し、同意書の署名をもって承諾を確認した。

また、学生が実習する急性期医療を展開する2施設の承諾は、看護部に「研究計画書」を用いて研究の主旨の説明を行い研究協力の承諾を得た。

## IV. 結果

本研究への同意が得られた研究参加者92名のレポートを分析対象とした。

### 1) 学生の受け持ち患者の概要

学生の受け持ち患者の概要を表1に示した。男女比は男性70%、女性30%で男性患者が多かった。成人看護学実習という名目上、成人期の対象を受け持つことが望ましいが、実際の受け持ち患者は成人期13%、老年期の該当者が87%であった。内訳をみると70歳代が40%と最も多く、次いで60歳代31%、80歳代15%、50歳代12%であった。

受け持ち患者が抱える疾患については、実習病棟の特性が大きく反映することが予測されたが、主要な疾患が網羅された結果であった。老年期の対象が多く重複疾患を抱えていたが、主疾患は脳神経系疾患、呼吸器系疾患、腎泌尿器系疾患がそれぞれ18%、循環器系疾患、血液造血器系疾患、消化器系疾患がそれぞれ12%、その他8%であった。

### 2) 学生が注目した患者現象の分析結果

学生が注目した患者現象は、学生が捉えた看護問題をM. ゴードン博士が開発した11の機能的健康パターン毎に分類し、更に看護問題特定の判断に用いた【概念】を注目した患者現象として抽出した。判断に用いた概念は対象が示す健康問題に対する反応であるため概念を抽出

表1 学生の受け持ち患者の概要

男性 64名(70%)		女性 28名(30%)	
年齢	人数(%)	疾患	人数(%)
40歳代	1(1)	脳神経系疾患	17(18)
50歳代	11(12)	呼吸器系疾患	17(18)
60歳代	28(31)	腎泌尿器系疾患	17(18)
70歳代	37(40)	循環器疾患	11(12)
80歳代	14(15)	血液造血器系疾患	11(12)
90歳代	1(1%)	消化器系疾患	11(12)
合計	92(100)	その他	8(9)

することで、患者に起こっている現象を把握することができる。分析結果を表2に示した。

パターン分析の結果は、多い順に健康知覚—健康管理パターン32例(35%)、活動—運動パターン29例(32%)、認知—知覚パターン9例(10%)、自己知覚—自己概念パターン7例(8%)、栄養—代謝パターン5例(5%)、コーピング—ストレス耐性パターン1例(1%)であった。健康知覚—健康管理パターンと活動—運動パターンの看護問題が特徴的に多い傾向にあった。一方で排泄パターン、睡眠—休息パターン、役割—関係パターンや価値—信念パターンからの特定はなかった。

次に患者現象の分析をパターン毎に示す。最も看護問題の特定が多かった健康知覚—健康管理パターンにおいては、“非効果的自己健康管理”、“自己健康管理促進準備状態”“安全行動の未修得”“感染リスク状態”“転倒リスク状態”などの看護問題が特定されていた。このパターンで看護問題特定の判断に用いられた【概念】は【自己健康管理】【安全行動】【感染】【転倒・転落】【身体外傷】【気分転換活動】であった。次に多く看護問題が特定されていた活動—運動パターンでは、“セルフケア不足”、“セルフケア促進準備状態”、“廃用症候群リスク状態”、“非効果的呼吸パターン”などであった。用いられた概念は、【セルフケア】【廃用症候群】【呼吸パターン】【筋力】【循環動態】【心拍量】【生活リズム】【ADL】であり、様々な視点から患者現象が判断されていた。3番目に多かった知覚—認知パターンでは“知識不足”、“安楽障害”、“認知機能低下”が看護問題として特定されていたが、用いられた概念は【知識】【安楽】【認知】のみであった。

特定された看護問題の内約1割が患者の心理的な側面に焦点をあてた看護問題を特定していた。自己知覚—自己概念パターンの“不安”並びにコーピング—ストレス耐性の“ストレス過剰”であるが、用いられた概念はそれぞれ【不安】と【ストレス】のみで自己概念、自尊感情、恐怖、コーピングなどはなかった。

上記に示した看護問題は用いられている概念から機能

的健康パターンを用いて分類することが可能であったが、何れにも該当しない共同問題と判断したものが8例(9%)みられた。内容は化学療法導入時の副作用やシャント造設時のトラブル、様々な術後の合併症を捉えたものであった。

### 3) 学生の学びの分析結果

学生の学びの分析結果を表3に示した。以下、文中に示したマークは、カテゴリ《 》、サブカテゴリ〔 〕、学生の記述「 」を意味する。

学生の学びを質的帰納的に分析した結果、4つのカテゴリ、25のサブカテゴリに大別された。4つのカテゴリは《慢性疾患の対象の理解》、《慢性疾患に特徴的なケア》、《対象との紡ぎ合いの中での学び》、《自己の看護観の明確化》であった。

#### (1) 慢性疾患の対象の理解

《慢性疾患の対象の理解》は、〔慢性疾患を共に歩む〕、〔対象理解の重要性〕、〔生活者として対象を捉える〕、〔対象の心理を理解する〕、〔対象にとっての行動の意味〕、〔患者役割として要求されること〕、〔学習体験の意味づけ〕の7つのサブカテゴリが導かれた。

具体的な学生の記述は、「慢性の疾患を持っている患者はいかに病気とうまく付き合っていく能力を獲得するかが目標となる。」「症状の言葉でしか聞けておらず本当の意味でがんに対する治療に対する患者の気持ちを聞いていなかった。そのため、行ったケアは合っても必要性を理解して頂けず良い効果を得られることができなかった。」「一緒にパンフレットを活用していく過程は、何かしら健康に良いだろうと漠然と実行するという形でなく、自分で危険因子を挙げ、なぜ予防行動を行っているのか、自分を守るにはどうすればよいかを考える良い機会になった。」等であった。

このカテゴリの学びをまとめると、学生が慢性疾患の対象を理解していくプロセスで捉えた対象理解の重要

表2 学生が目指した看護問題と機能的健康パターンによる分類と判断に用いられた概念

機能的健康パターン	数	看護問題と判断に用いた概念
1. 健康知覚—健康管理	32	非効果的自己健康管理、自己健康管理促進準備状態、感染リスク状態、転倒転落リスク状態など 【健康管理】【安全行動】【感染】【転倒・転落】【身体外傷】【気分転換活動】
2. 栄養—代謝	5	低栄養状態、誤嚥リスク状態、皮膚統合性リスク状態など 【栄養】【誤嚥】【皮膚統合性】
4. 活動—運動	29	セルフケア不足、廃用症候群リスク状態、非効果的呼吸パターンなど 【セルフケア】【廃用症候群】【呼吸パターン】【筋力】【循環動態】【心拍量】【生活リズム】【ADL】
6. 認知—知覚	9	知識不足、安楽障害、認知機能低下など 【知識】【安楽】【認知機能】
7. 自己知覚—自己概念	7	不安 【不安】
10. コーピング—ストレス耐性	1	ストレス 【ストレス】
共同問題	8	化学療法、シャントトラブル、腎生検術後、ペースメーカー術後、回腸導管術後

表3 学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	学生の記述
慢性疾患の対象の理解	慢性疾患を共に歩む	慢性の疾患を持っている患者はいかに病気とうまく付き合っていく能力を獲得するかが目標となる。
	対象理解の重要性	症状の言葉でしか聞けておらず本当の意味でがんに対する、治療に対する患者の気持ちを知ることが出来なかった。そのため、行ったケアは合っていない必要性を理解していただけたら良い結果を得られることが出来なかった。
	生活者として対象を捉える	患者さんとしてではなく、一人の生活者として対象を見ていき、より生活に踏み込んでいく事で、良い援助につながる。
	対象の心理を理解する	A氏との最初の関わりでは、病気や治療に対する不安は見られず「早く良くなって退院したい。」といった言動からも、がん告知の受け止めができており、希望を持ち承認の段階にあったと考える。しかし、病状の進行により現在の身体状況や今後の治療方針、ターミナルの話を含めたインフォームドコンセントがなされたことで、少し落ち込んだ表情が見られたことや口腔内観察に対して拒否がみられたのは気持ちの整理ができていなかったことが考えられ、今までの自分自身への認識が変容したため、再び防衛進行の段階に戻ってしまったと考える。
	対象にとっての行動の意味	一緒にパンフレットを活用していく過程は、何かしら健康に良いだろうと漠然と実行するという形ではなく、自分で危険因子を挙げ、なぜ予防行動を行っているのか、自分を守るにはどうすればよいかを考える良い機会となった。
	患者役割として要求されること	健康であったからこそ持っている患者自身の健康に対する自信を大切にしていける必要があるが、入院では、「病者は『よくなる』ために、医療チームや家族、友人などからの助言に従うことが要求されると言及されているように依存傾向にあることを要求されると考える。
	学習体験の意味づけ	低血圧の治療には患者教育と生活指導が最も大切である。「起き上がりの指導はゆっくり行うように指導する」とあり、実際にベッド上で30°、40°、50° 端坐位と段階を踏み、時間をかけこまめに血圧を測っていくことで、T氏にも数値が目に見えてわかり、体験することで教育につながっていくと考えられる。
慢性疾患に特徴的なケア	慢性期患者に対する特徴的な看護の視点	治療に対するストレス、入院によるストレス、副作用によるストレス、患者自身性格上あまり自分のことを話したくないため、知らず知らずのうちにストレスや不安をため込んでいた可能性があり、化学療法による副作用も重なり食欲不調という症状が急に出現したと考えられる。それを踏まえたうえで看護ケアを実施しなければならなかった。
	慢性疾患の特徴を踏まえた看護	長期療養だからこそこかえる不安や問題などがあり良い方向だけにすむだけではなく悪い方向にもすむこともあることも学んだ。
	社会的支援の重要性	今の機能を維持するためにも、本人からの情報だけではなく家族からの情報も収集し、家族のサポート体制も十分であるかアセスメントする事で、自宅においても入院時で獲得できたセルフケア能力が維持できるのではないかと感じた。
	対象の生活を踏まえた援助の必要性	高齢になると活動と休息のバランスはとりにくく、個人差の大きいものになると考える。生活リズムの特性を把握し援助に反映させ、タイミングに合わせた援助が必要である。
	セルフケア能力を高めるサポート	受け持ち患者に対して、セルフマネジメント能力を高めていくためにはできていないことだけに着目するのではなく、A氏の意志や努力によって満たすことができた点についても着目し、肯定していくことで、さらに患者の自己効力感の充足に繋がり、退院後のセルフマネジメント能力向上につながる可能性がある。
	対象との関わりの効果	様々な誘因が重なって褥瘡は発生するその誘因を毎日1つ1つの援助によって身体的緩和につながるが同時に医療者のケアによる安心や苦痛からの解放によって、患者の「死への恐怖」を過ぎることが出来る。褥瘡の予防のためにセルフケアを行うことは、終末期における患者の身体的な問題が例え患者が言葉で気持ちを表現しなくても精神的なことに結びつくだということも学んだ。
対象との紡ぎ合いの中での学び	援助の効果を伝える大切さ	援助をする目的を患者に伝えるときに大切な事は、これを行うことでこんなにいいことがある、ということだけを患者に感じてもらうかである。何かを促す際に、患者が自分を信頼していないと実施には至らないため、関係性の構築も重要である。
	対象と一つになる	A氏のできている部分を促進し且つ患者さんとのコミュニケーションを通じて必要である援助を判断し行って行くことで医療者と患者さんがひとつになって治療していく事が大切であると感じた。
	対象の希望に合わせる	まずは相手の思いや訴えを第一に優先していき重要性が理解できた。そのためには患者の表情、発言、身体状況を観察し現在A氏にとって何が辛いのかを考えることが大切。患者のことを理解することで患者が話してくれた内容に関心をもつことができ、感情を共有することが信頼につながる。
	対象との信頼関係の構築の必要性	患者さんと看護師の間に信頼関係がない場合、患者さんから必要な援助を拒否されたりすることで患者さんとの距離が遠くなるために患者さんの異常に気付くことが遅くなり、結果的に患者さんにとって不利益なものになってしまった。
	意欲や努力を正面から受け止める	A氏がリハビリを意欲的に行い回復に向けて努力していることを正面から受け止めながら、危険性について説明することで、今まで危険だと思っていたA氏の意欲さえも今後のA氏の強みとして変えていくことがA氏の精神的にも必要であり、身体の回復にもつながる。
	出来ることを増やし高める関わり	目標を立てるにあたって、患者自身が退院後にどのようにしたいのか思いを傾聴し、患者の持つ能力を発揮しながら患者の望みに少しでも近づけるような援助を計画していくことが大切である。
	コミュニケーションは対象のメリット	コミュニケーション取ること何かしら患者さんにとってメリットになるものである。そのため、患者さんとのコミュニケーションで、患者さんにとってデメリットにはならないと感じた。
自己の看護観の明確化	自己の看護実践の意味づけ	実施を振り返ると継続性や教育効果を考え、患者が自発性を発揮できることを目指して行った今回の方法はアンドロギー(成人教育学)の教育観に則ったものだった。
	対象と関わることで新たな看護の気づき	ストレスは本人が感じるものであり、それがどの程度でありどの程度軽減されるのか分からず援助を行っていく中で戸惑いもあったが、気分転換を促し、闘病意欲の維持を目的に足浴、清拭、散歩の援助をしていき、その結果が患者の明るい表情や発言として現れる事で行った援助が闘病意欲を維持するのにも効果的であったことがわかった。
	看護師の役割の理解	自分一人の希望や考えを押しつけて患者さんたちと関わっていくことは看護ではない。また、一方的な姿勢での関わりは互いの信頼関係を築くこともできない。A氏が現在自分自身のことでもどれくらい理解できているのか、何が必要なのかを一緒に考えて行くことでその人に合った目標や方向性が導き出され、相手に寄り添った看護が提供できる。
	看護師としての姿勢	医療従事者からはよくある一般的なことであっても、当たり前に行ってきた事であったとしても、初めてその病気になり治療を行う患者からしたら当たり前でないことが多い。その差を埋めるためにも、患者自身が入院に対してどのように考え、自身の患者役割を決めているのかその決めたことによるストレスになっていることはないかを観察しアセスメントを行っていくことが今後入院をしたとしても自主的に疾患へ興味を持つことにつながるかと考える。
自己を見直す	A氏の患者教育に当たり自分に知識がないと患者に伝わらないため、しっかりと病態を理解し患者の性格を把握したうえで分かりやすく伝えることが大切であると感じた。	

性、対象の心理面や行動面の意味を洞察していくことの重要性、対象理解から看護ケアに結び付けていくことなど慢性疾患を抱える対象の看護の前提となる対象理解の重要性が学びとして表現されていた。

#### (2) 慢性疾患に特徴的なケア

《慢性疾患に特徴的なケア》には、「慢性期患者に対する特徴的な看護の視点」、「慢性疾患の特徴を踏まえた看護」、「社会的支援の重要性」、「対象の生活を踏まえた援助の必要性」、「セルフケア能力を高めるサポート」、「対象との関わりの効果」の6つのサブカテゴリーが導かれた。

具体的な学生の記述は、「長期療養だからこそ抱える不安や問題などがあり良い方向に進むだけでなく悪い方向にも進むことがあることを学んだ。」「高齢になると活動と休息のバランスがとりにくく、個人差の大きいものになると考える。生活リズムの特性を把握し援助に反映させ、タイミングに合わせた援助が必要である。」「患者自身性格上あまり自分のことを話しながらないため、知らず知らずのうちにストレスや不安をため込んでいた可能性があり、化学療法による副作用も重なり食欲不振という症状が急に出現したと考える。それを踏まえた上で看護ケアを実施しなければならなかった。」等であった。

このカテゴリーの学びをまとめると、学生が慢性期の対象への看護実践する上で必要な慢性疾患の特徴を踏まえた支援、特にセルフケア能力の促進に向けた支援やソーシャルサポート、発達段階や個別性を意識し生活過程を整えていく看護の視点が記述されていた。

#### (3) 対象との紡ぎあいの中での学び

《対象との紡ぎあいの中での学び》には、「援助の効果を伝える大切さ」、「対象と一つになる」、「対象の希望に合わせる」、「対象との信頼関係の構築の必要性」、「意欲や努力を正面から受け止める」、「出来ることを増やし高める関わり」、「コミュニケーションは対象のメリット」の7つのサブカテゴリーが導かれた。

学生の具体的な記述は、「A氏の出来ている部分を促進し且つ患者さんとのコミュニケーションを通じて必要である援助を判断し行って行く事で医療者と患者さんがひとつになって治療していく事が大切であると感じた。」「まずは相手の思いや訴えを第一に優先していく重要性が理解できた。(中略)何が辛いのか考えることが大切。患者のことを理解することで患者が話してくれた内容に関心を持つことができ、感情を共有できることが傾聴に繋がる。」「患者さんと看護師の間に信頼関係がない場合、患者さんから必要な援助を拒否されたりすることで患者さんとの距離が遠くなるために患者さんの異常に気付くのが遅くなり、結果的に患者さんにとって不利益なものになってしまう。」等であった。

このカテゴリーの学びは、対象とのコミュニケーションをはかりながらケアを提供していく中で多くの学びが表現されていた。ケアを提供する際に対象の希望や考え方を尊重することの重要性や対象の意欲や努力を真正面から受け止めることが対象との信頼関係に結びつくことなど看護師として求められるケアリングの姿勢が記述されていた。

#### (4) 自己の看護観の明確化

《自己の看護観の明確化》には、「自己の看護実践の意味づけ」、「対象と関わることでの新たな看護の気づき」、「看護師の役割の理解」、「看護師としての姿勢」、「自己を見直す」の5つのサブカテゴリーが導かれた。

学生の具体的な記述は、「実施を振り返ると継続性や教育効果を考え、患者が自発性を発揮することを目指して行った今回の方法はアンドラゴジーの教育観に則ったものであった。」「医療従事者からはよくある一般的な事であって、当たり前に行ってきた事であったとしても、初めてその病気になり治療を行う患者からしたら当たり前でないことが多い。その差を埋めるためにも、(中略)ストレスになっていることはないかを観察しアセスメントを行っていくことが今後入院したとしても自主的に疾患へ興味を持つことに繋がると考える。」「A氏の患者教育に当たり自分に知識がないと患者に伝わらないため、しっかりと病態を理解し患者の性格を把握したうえで分かりやすく伝えることが大切であると感じた」等であった。

このカテゴリーの学びの特徴は、対象との関わりを通して学生が看護実践したことをアンドラゴジー、自己効力感、セルフケア、病者役割行動などの中範囲理論を活用し、看護実践を意味づけることから看護の新たな気づきを得ていたことである。また、臨地実習体験から看護する者としての有り様を洞察することで自分が考える看護について発展した学びが得られていた。

## IV. 考察

成人看護学慢性期実習後に学生が記述した課題レポートから、学生が目じた患者現象ならびに学びの特徴が明らかとなった。以上の結果から、まず学生が目じた患者現象の傾向について考察する。次に学生の学びの特徴について考察する。

### 1. 学生が目じた患者現象

92名が受け持った患者は、老年期の対象が多く、主要な疾患を網羅されているという結果であった。この結果の背景には現代の疾病構造や実習施設が急性期医療を展開する施設であったこと、基礎疾患の発症から長期間の経過を経て入院加療段階に至るといった慢性疾患の特性が

影響しているものと判断された。このように成人看護学慢性期実習において受け持ち患者が老年期に偏る傾向は、先行研究<sup>1)~3)</sup>でも同様の傾向が認められている。一方、対象の疾患特性については先行研究では幾つかの疾患に偏る傾向があるが本学の実習においては主要疾患が網羅されていた。これはある特定の病棟実習ではなく複数の病棟の協力が得られ、幅広い学習が可能な体制が整っていると言える。

このような実習環境の中で学生の捉えた患者現象は、機能的健康パターンの健康知覚—健康管理パターンと活動—休息パターンに偏る傾向にあった。この傾向は、池田<sup>4)</sup>らの慢性期実習で学生が立案した看護診断が2つのパターンから抽出される傾向にあるという報告と同様の結果であった。慢性疾患特有の疾病コントロールの乱れやADLへの影響が現れたことが入院のきっかけとなっていることから、学生にはこの2つのパターンの情報も得やすく患者現象は捉えやすい内容と言える。また、今回の老年期が多いという対象特性からもADLの確立や安全行動は学生が捉えやすい患者現象であった。

がん患者を受け持った学生は、知覚—認知パターンで安楽が阻害された患者現象を捉えていた。これも自覚症状の訴えや身体状態からアセスメントしやすい現象であるが、本来の心理学的、社会的、文化的な側面からの安楽を把握するまでには至っていない。同様に、対象との関係性や概念の困難さ、解釈の多様性のある自己知覚—自己概念パターンやコーピング—ストレス耐性パターン等の心理社会的側面も学生にとっては把握しにくい患者現象である。2週間という短期間の実習においては、対象との関係性を構築し、ケアを提供するという課題を乗り越えることに1週間の時間を費やし、その後、徐々に対象との距離を縮めて心理社会的側面を捉えていく。短期間の中で心理社会的側面を考えられるようにするために、学生が捉えやすい健康知覚—健康管理パターンや、活動—運動パターンの理解からそれぞれの背景に存在する心理社会的側面を考察していく。これまで11パターンのアセスメントを同時に進めてきたが、学生が捉えやすいパターンや表面化している患者現象から対象に関わり、その後心理社会的側面のアセスメントを発展させることで2週間という短期間の実習でも学生が過剰な負荷を感じることなく学びを深めることができる。その患者現象を読み解いていく作業を教員、臨床実習指導者がサポートしていくことが効果的な方略であることが明らかとなった。

## 2. 慢性看護学実習での学生の学び

粕谷<sup>5)</sup>らは、短期大学3年次の全実習終了後に慢性看護学実習の事例検討会で学生のリフレクションを行い、その後のまとめのレポートから振り返り学習におけ

る学びを分析した。本校は、短期大学3年次の慢性看護学実習後に事例検討会は設けていないが、粕谷らと同様の学びが見出された。特に粕谷らのカテゴリーの《自己の看護観の育成》、サブカテゴリーに〔看護倫理〕が抽出されたが、本研究ではサブカテゴリーに〔看護師の役割の理解〕や、〔看護師の姿勢〕、〔自己の見直し〕が抽出され、カテゴリーは《自己の看護観の明確化》に至っていた。一方、粕谷らの研究結果の《継続看護の必要性》、〔他職種との連携〕の記載はなかった。

谷村<sup>6)</sup>らは、大学生の3年次後期の慢性看護学実習終了後の課題レポートより実習における体験の内面化に至った事例4例/139例で分析をしている。本研究では、短期大学3年次92名の慢性期看護学実習最終日の課題レポートからの学生の学びを分析しているが、同様の学びが抽出された。谷村は具体的な実習場面を示し、関わりの中で起こった現象、事象等課題レポートの記載内容やスキルの指導を行い、教員間で統一した指導を実施している。上記2つの研究結果と本研究は同様の結果が得られたのは、実習期間中の学生指導によるものと考えられる。

本校では、実習開始前にレポート作成基準を学生に渡し、さらに実習と並行してレポートが作成できるようなタイムスケジュール例を紹介した。また、実習期間中に学生が学びを意識化出来るよう、日々の対象理解や、援助の振り返りを通してリフレクションを実施し、加えて看護計画を立案し看護の方向性を見いだした実習2週目の火曜日に学生が注目している看護概念を取り上げたテーマカンファレンスを実施した。そこで、学生の看護実践の意味付けを促進し、学生の学習状況に応じて、学びのレポート作成が出来るように中範囲理論の文献を提示している。以上の関わりから2週間の間に内面化のプロセス、意味づけの時間を持っていたことが考えられる。粕谷らは実習後に改めてリフレクションの時間を取っていたが、本校では実習最終日を学内日とし学びのレポートを提出しており、2週間の実習の中でも同様の学びができることが明らかとなった。以上より、学習を促進させるのは、日々の対象理解および看護実践の意味づけや学生が学びを焦点化できるような中範囲理論等の文献の提示およびカンファレンスの運営が重要であることが考察された。

一方、本校の分析結果から〔他職種との連携〕の結果が見いだせなかったのは、本学生は、社会資源として家族を捉えることが出来ているが、他職種と連携するような看護計画の立案や介入に限界があり、他職種との連携場面に関わる機会が少ないことが考えられる。実習指導の際、意識して他職種と連携する場面や他職種のチームカンファレンス等に学生を参加させ上記視点を育てる必要がある。

## V. 結論

1. 慢性期看護学実習の学生の学びのレポートの分析より、4つのカテゴリー《慢性疾患の対象の理解》、《慢性疾患に特徴的なケア》、《対象との紡ぎ合いの中での学び》、《自己の看護観の明確化》が抽出された。
2. 学生が目にした患者現象は、機能的健康パターンの健康知覚—健康管理パターンと活動—休息パターンに偏る傾向にあった。
3. 慢性期看護学実習の学生の学びを促進するために、日々の対象理解および看護実践の意味づけや学びを焦点化できるような中範囲理論等の文献の提示およびカンファレンスの運営が重要である。
4. 本学生は、〔他職種との連携〕の学びの機会が少ないことが明らかとなり、実習指導の際、意識して他職種と連携する場面や他職種のチームカンファレンス等に学生を参加させ上記視点を育てる必要がある。

## 謝辞

本研究を行うに当たりご協力頂いた学生の皆様、実習での学びの機会を与えて下さった受け持ちにご協力頂いた患者様、学生の学びを深めるご指導にご協力頂いた実習施設の病棟看護師長、臨地実習指導者および職員の皆様に深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 谷村千華、森本美智子、大庭桂子、野口佳美. 看護学生の成人（慢性）看護学実習における体験のプロセス、21（1）、39-49（2011）
- 2) 池田貴子、長嶋祐子、西田幸典、風岡たま代、成人看護学実習の急性期と慢性期における看護問題の特徴—学生が関わった看護問題の分析—、横浜創英短期大学紀要、8、99-104（2012）
- 3) 長嶋祐子、中居由美子、風岡たま代、池田貴子、西田幸典成人看護学実習で学生が最も学んだと認識している内容、横浜創英短期大学紀要、8、155-160（2012）
- 4) 前掲書2）99-104
- 5) 粕谷恵美子、遠藤恭子、慢性期看護学実習の振り返り学習における学び—リフレクションを通して得た知識と実習目的との比較—、足利短期大学研究紀要、30、41-46（2010）
- 6) 前掲書1）39-49

## 参考文献

- 1) 石井俊行、坪井敬子、岡本裕子、坂村八重ら、臨地実習における学生の学び—成人看護学慢性期実習終了後のレポートの分析より—、インターナショナル

- Nursing Care Research、6（1）、51-58（2007）
- 2) 大橋洋子、木竜理恵、山田洋子、河内直美他、看護学生の成人期の特徴の捉えに関する調査—看護実習終了時のアンケートより—、日本看護学会論文集—看護教育—、37、45-47（2006）
- 3) 柿原加代子、松田日登美、原田真澄、基礎看護学実習（見学実習）におけるレポート記述内容の質的分析、日本赤十字愛知大学紀要、15、1-13（2004）
- 4) 吉田澄江、青木きよ子、菓子嘉美、奥出有香子他、成人看護学実習の学習内容の分析—セルフケア能力の維持・向上への援助を学ぶ実習—、順天堂大学医療短期大学紀要、12、25-34（2001）
- 5) 宮堀真澄、永井美奈加、榊紘子、患者の語りから看護学生が捉えた慢性疾患を持つ人の看護—腎センター実習記録物の内容分析から—、日本赤十字秋田短期大学紀要、12、37-45（2008）
- 6) 近藤裕子、園田裕子、渡邊郁子、河原田築子他、透析センター見学における看護学生の透析者への理解—成人看護学実習における記録の分析から—、愛知きわみ看護短期大学紀要、6、87-91（2010）
- 7) 若林理恵、安田智美、寺境夕紀子、吉井忍、他実習記録から見た成人看護学実習における学び、富山大学医学部看護学会誌、7（1）、43-54（2007）
- 8) 上西洋子、看護学生による慢性期老年患者「もてる力」の活用、日本看護福祉学会、9（2）、25-32（2004）
- 9) 上田幸子、横川絹恵、白神佐知子、逸見英枝、松本幸子、成人看護学慢性期実習における透析センター見学実習の意義、新見公立短期大学紀要、20、151-158（1999）
- 10) 青木きよ子、吉田澄江、高谷真由美、朝野未知恵他、セルフケアを焦点に構築した成人看護学の教育評価、順天堂大学医療看護学部 医療看護研究、2（1）、139（2006）
- 11) 大庭佳子、谷村千華、野口佳美、森本美智子、成人（慢性）看護学実習における学生の関心事象—課題レポートの分析より—、日本看護学教育学会誌、19（2）、23-31（2009）
- 12) 塚本友栄、伊藤まゆみ、大内章子、成人看護学実習でQOLの視点を取り入れたことによる学生の学び、日本看護教育学会誌、12（1）、19-24（2002）

著者への連絡先：寺田智美 〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地 神奈川県歯科大学短期大学部看護学科  
TEL：046-822-9565 FAX：046-822-8787  
E-mail：tereda@kdu.ac.jp